



～ 目次 ～

♥ 1章目 穢される白タイツ

♥ 2章目 慣れない便秘薬で……寝糞

♥ 3章目 スクール水着で大決壊！

♥ 4章目 下校中に、我慢できなくて

♥ 5章目 もこりっ、歪に膨らむブルマ

♥ 6章目 わざとうちを漏らす背徳感

♥ むふふ イラスト集コーナー

♥1章目 穢される白タイツ

「……んっ、気持ちいい風……」

頬を撫でていく、初夏の風に碧眼を細めたのは、ベンチに腰掛けて小説を読んでいる、一人の少女。

名前を、
如月ひなぎく、
と言った。

ふんわりとしたロングヘアはお尻を隠すほどに長い。

明るい色をした髪の毛はところどころ跳ねているけど、それがだらしなく見えるのではなく、かえって愛嬌があるように見える。

大きな碧眼は、ひなぎくのおっとりとした性格を体現しているかのように、かすかに眠たげにまなじりが下がっていた。

ふっくらとした女性的な身体を包み込むのは、学校指定のセーラー服。

だけど、その身体つきは同世代の女子と比べても豊満に制服を押し上げていた。

ひなぎくは読みかけの小説に葉を挟むと、ベンチに置いているカバンに仕舞う。

ときは初夏の放課後。

場所は学校の中庭にあるベンチ。

「そろそろ帰らないと」

ひなぎくはベンチから立ち上がると、大きなお尻を包み込んでいるスカートの裾を整える。

おっぱいも大きく膨らんでいるけど、同じように膨らんだお尻は

ひなぎくの密かなコンプレックスだった。

短くしている気はないけど、お尻が大きくてスカートが心なしか短く感じるし。

「お尻、スースーするの、あんまり好きじゃないんだけどな」

ひなぎくは呟くと、学生カバンを持って歩きはじめる。

そんなひなぎくの脚線美を包み込んでいるのは、薄手の白タイツ。

ショーツが見えないように、そしてお腹を冷やさないために、ひなぎくは初夏になっても白タイツを穿いていた。

「あ……っ」

数歩、歩き出して、ひなぎくはフラッと立ちくらみを覚えてしまう。

ずっと読書して急に立ち上がったせいだ。

「さっきまでモンスターと戦ってたのになぁ……」

小説の中でひなぎくは、ドラゴンを跨いで通るほどに強い女魔導師だった。

だけど現実ではあまり運動が得意ではない、おっとりとした女の子だ。

しかもお尻が大きくて鈍くさいときている。

だから、なのかもしれない。

ひなぎくが冒険もののファンタジー小説を好んで読むのは。

(早く帰って続き読みたいな。ああ、でもその前に宿題片付けないとな。今日中に読み切って……、もうすぐ新刊出るし)

そんなことを考えながら、ひなぎくは放課後の校門を出る。
ひなぎくの家は、学校から歩いて20分ほどの距離にある。
いつも学校の中庭にあるベンチで本を読んで帰ることにしているから、他に下校している生徒は少なく閑散としていた。
ヒナギクは人混みがあまり好きではないから、あえて下校時間をずらすことにしているのだけだ。

(今日は……国語と数学の宿題が出てたから……まずは国語からやって、それから数学……はぁ、数学、やだなぁ……)

文学少女を自認しているひなぎくにとって国語の問題は容易いものだけど、複雑な公式を使った数学はなによりも苦手とするものの一つだった。

数字を見ているだけで頭が痛くなってくるほどだ。

(はぁ……)

憂鬱げなため息をつき、いつもの家路……閑静な住宅街を歩いていると。

ぎゅるるっ。

かすかに、しかし確かな呻き声を上げたのは、ひなぎくのお腹だった。

可愛い制服に包まれているけど、このお腹にはひなぎくが抱えている『もやもや』がたくさん詰まっているのだ。

最後にお通じがあったのは……。

「二週間前、だったっけなぁ……」

ひなぎくは固く張ったお腹をさすりながら呟く。

運動があまり好きではない……と、いうよりも嫌いなひなぎくは、極度の便秘持ちなのだ。

そのくせお腹を冷やすとすぐに下痢をしてしまうから、白タイツを穿いている。

それなのにお腹が蠢動を始めたということは――。

「う、うそ……、急にくるなんて……！」

**ぎゅるるっ、
ぎゅるるるるるる！**

まるで大腸を雑巾のように絞られているような痛み。

ひなぎくの額に、冷や汗が滲み出る。

ずっと抱えていた便秘のモヤモヤ感が出てくれるのは嬉しいけど、今は下校中だ。

近くには公衆トイレさえもない。

「こ、こんなところで……ううっ」

**きゅるるっ！
ごぼっ、ごぼぼ！**

校門を出て、すでに10分。ちょうど中間地点だ。

学校に引き返すも、このまま家に帰るのも同じくらいの距離。

しかも急にお腹が痛くなってきたから、歩くスピードも遅くなっている。

ちょうど見える範囲には人がいないことが、不幸中の幸いだったが……。

「あっ、あああ！」

ぶすっ、ぶすす……。

肛門が拡張され『なにか』が出ていく感触。

ひなぎくは歩みを止めて、反射的に背筋をピーンと伸ばしてしま
う。

そうでもしてお尻を閉じていないと、腸内のモノが溢れ出してき
そうだった。

ただでさえ、ぷりっとして脂の乗った、大きなお尻の括約筋は弱
い。

その狭間から、

メリ、メリメリ。

固く、太いものが1ミリずつ押し出されている感覚。

間違いない。

2週間ものあいだ眠っていた腸が目覚めたのだ。

「ううっ、だ、だめえ……っ」

メキ、メキリ、メキメキ……。

女の子のうんちは、太く、固い。

それは便秘のカチカチうんちに何回も肛門を開発されているから
だ。

どんなにお尻に力を入れても、女の子の柔らかいお尻ではカチカ
チに固まったうんちを堰き止めることはできない。

「あっ、あっ、ううう！」

メリメリメリ……、
プスッ、ぶすす……っ。

そしてついに。

カチカチうんちの先っちょが、ショーツにあたる感覚。

それでうんちが止まってくれるはずもなく、ひなぎくのヒップラインを包み込んでいるショーツは、白タイツ諸共モリモリと盛り上がっていった。

「か、固いのが……！ お、おしり、開かないで……っ、い、痛い、よお……っ」

カチカチの極太うんちに直腸を貫かれ、お尻を引き裂かれるような痛みに襲われる。

だけど、本当の悲劇はここからだ。

「おっ、おおお……！ んっ、んおお！ ああああ、だめ！」

にゅるるるるるるる！
モリモリモリッ！

カチカチに固まっていたうんちが熱く、柔らかくなってくると、直腸を一気に滑り出してきたのだ。

一瞬にしてショーツのなかが熱いマグマに満たされて、ひなぎくは舌を突き出して痙攣してしまう。

もしも周りに人がいたとしたら、なにごとかと思ったに違いなかった。

「あっ、あええ……！ か、かはっ！」

もりもりもりもりもり！
ブリッ！ ブリブリブリブリ！

スカートに包まれた、ただでさえふっくらとした大きなお尻が、更にその輪郭を膨らませていく。
モリモリと白タイツが盛り上がっていくと醜悪な茶色い香りを放ち出す。

「あっ、おっ、おひり……！ ゴッ、ゴポ……！ あうっ、あうう！ えあぁっ」

ひなぎくの口から、ブワッと大量のヨダレが溢れ出してくると、あごを伝い落ちて胸を汚していく。
それはひなぎくのコンプレックス――。
少しでも快楽を感じると、大量のヨダレを溢れ出させてしまうのだ。
美味しいものを食べたときは当然のこと、可愛いものを見たときや、お風呂に入ったときにも。
更にはおしっこやうんちをしたときにもヨダレが溢れ出してきたりしてしまう体質なのだ。

「あっ、あううっ、ご、ごぼ……っ、んっあ、ひっひい！」

ブリュブリュブリュ！
ニルルルルルルルルル！

ショーツのなかか熱い流動体に満たされて、お尻を包み込む白タイツがパンパンに膨らんでいく。



お尻の部分では収まりきらなくなっただうんちは、ついには会陰を伝って女の子のワレメのほうにまで押しよせてくる。
「ひっ、ひあぁっ、んあぁっ、んあぁ！ おおおお！ ごぼ……っ、ら、らめえっ」

ブボボボボボボボ!!

茶色い炸裂音を轟かせながら、ひなぎくはだらだらとヨダレを垂らし続ける。

それは、うんちおもらしという痴態を晒しながらも、ひなぎくが快感を覚えているというなによりもの証だった。

「あひっ、ひっ、ひいっ」

ブリュリュリュリュ!

ブポッ! ブニユルニユルニユル!

チリリッ!

股間から生み出される微弱電流に、ひなぎくは更に肛門を緩ませてしまう。

下痢によってクリトリスが蹂躪され、包皮が剥けてしまっているのだ。

こうなると、もはやひなぎくにはどうすることもできなかった。

「あっ! ああぁ……っ! えあああっ」

ブボポッ!

スカートに包まれたお尻から、茶色い炸裂音が鳴り響く。
排泄欲を満たして快楽を覚え、更にはクリトリスを勃起させて。

それはまさに垂れ流しだった。

「んおっ、おおおお！ ふっ、ふうう！」

ヨダレに塗れた舌が突き出される。
突き出された舌が、クィッと硬直する。
直後、

おぼっ、おぼっ、おぼぼぼ！
がくっ、がくっ、がくんっ！

腰を痙攣させながら、そのたびに軟便を噴射する。
ひなぎくは、失便しながら絶頂してしまったのだ。

「うっ、あっ、あああん！」

じゅももっ！
じゅもももももももも！

達してしまった女性器というものは、あまりにも無防備だ。
そのうちに秘めた尿意さえも我慢できないほどに。
うんちに満たされたショーツの中が、ジンワリと生温かくなる。

「あっ、だ、めえ……っ」

しゅiiiiiiiiiiiiii……。

うんちにクリトリスを蹂躪され緩んだ股間が、勝手におしっこを漏らしてしまう。

うんちによって濾過されたおしっこは、茶色く穢れていた。

白いタイツが、茶色く染め上げられていく。

「あっ！ あっ！ あっ！」

ブリュリュリュリュ！
ビチ、ビチビチ、ビチチ！
しゅわわわわわわわわわわ～～。

座ることさえもできず、ひなぎくはうんちやおしっこを垂れ流してしまう。

足元におしっこの水たまりができあがり、悪臭が湯気となって立ち昇る。

「うっ、ううう！」

ブリッ！ ブリリ！
ブボボッ！ ブボッ！

空砲が混じった軟便を噴き出し、ショーツが更に盛り上がっていった。

やがて腸内の圧力が減り、やっとのことで大決壊は終わってくれる。

だが、もうすべてが手遅れだ。

「うう、ぱんっ重たい……よお」

タイツを穿いているから、うんちはミッチリとショーツの中に詰まっていた。

白タイツの内股は、うんちが混じったおしっこによって茶色く穢されている。

「早く、帰らないと……」

家まであと 10 分。

不幸中の幸いか、人通りが少ない閑静な住宅街だから、誰かと会う可能性は低いが……だけど、安心はできない。

白タイツは茶色く染め上げられているし、お尻からはヘドロよりも醜悪な香りを漂わせているのだ。

「どうか、誰にも会いませんように」

いつの間にか落としていたカバンを拾い上げて、ピンと背筋を伸ばして歩きはじめる。

ねちゃ、ねちゃ、ねちゃ……。

一歩進むごとに軟便がショーツのなかでネットリと攪拌され、おまたに食い込んでくる。

それでも歩を止めるわけにはいかない。

お尻を包んでいるスカートは、うんちによって一回りほど大きく膨らんでいる。

(お願い……、ばれないで)

人とすれ違うときは、カバンを両手で前に持って白タイツを隠して歩く。

すれ違ったら、後ろ手に持ってお尻を隠す。

だけど茶色い香りまでは隠せるはずもない。

ひなぎくが風上にいるときに、匂いを感じ取ったのだろう。

小学生の男の子たちが顔をしかめると、

『お前、おならしただろ』

『いや、言い出しっぺのお前だろ』

だなんて冷やかしかっている。

まさかひなぎくのお尻から漂ってきているとは夢にも思っていないに違いなかった。

(ごめんなさい、臭いよね……)

心のなかで謝りながら、ひなぎくは何とか家に辿り着く。

ひなぎくの家は、周りの家と比べるとちょっと大きめの洋館だ。

鉄格子でできた扉の上には檜が生えていて、扉の向こうには青々とした噴水を湛えた庭が広がっている。

噴水を中心としたロータリーを迎えるように、白壁の洋館が夕日を受けていた。

「な、なんとか辿り着けた……ふう……」

大きな鉄扉の横にあるインターフォンを押して、気が抜けてしまったとでもいうのだろうか？

ビチチチチ！

シューズの中に熱いものを漏らしてしまう。

これから広い庭を横切らないと、屋敷には辿り着けないというのに。

インターフォンを押して数秒後、メイドがひなぎくの顔を確認したのだろう。

『お帰りなさいませ、お嬢様』

スピーカー越しに聞こえるのは、冷たい感じのする女性の声。
その一言とともに、ゆっくりと鉄扉が自動で開かれていく。
あとは庭を横切るだけ。
もう人とすれ違うこともない。

「ふう……」

深くため息をつくと、

にゅるるるるるるるるる！

ショーツの中が重たくなるけど、ひなぎくは心のどこかでホッと
してしまっている。

——もう、ここまでくれば人と会うことはない——。
頭の片隅で、そんなことを考えていた。

「もう……、ちょっとだけ、楽になりたい……」

ブリュリュリュリュリュ！

しゅいはいいはいいはいい……。

我慢していたものをショーツのなかに吐き出し、お腹が楽になっ
て……、ひなぎくは、ゆっくりと広々とした庭を歩きはじめた。

☆

ひなぎくの部屋は、2階にある洋間だ。

広さは20畳ほどあって、窓からは噴水のある庭園を見下ろすこ
とができる。

一人で使うには広い部屋だけど、ひなぎくは雑然としたものがあまり好きではないから、必要最低限の机やベッドと華奢なティーテーブルと本棚があるくらい。

だけど本棚は大きなものが3つほど並んでいる。

「やっと辿り着いた……ふう」

まずはカバンを置いて、それからトイレに行って、それから汚してしまった下着を洗濯しなければ。

メイドたちにバレずにすべてをこなすことができるだろうか？
そんなことを考えていると。

「……あ」

ひなぎくが使っているダブルサイズのベッドの上に、綺麗に畳まれた下着が置かれているのではないか。

どうやら専属のメイドにはすべてお見通しらしい。

ひなぎくは替えの下着を手にとると、トイレへと急ぐのだった。

体験版はここまでです！

ここまで読んでくれて、

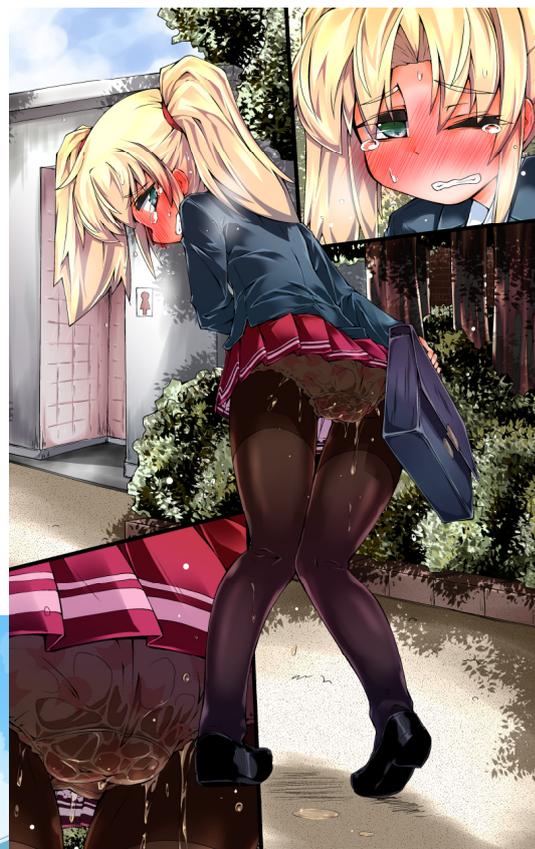
ありがとうございました！！

m(_ _)m

♥大決壊シリーズ フルカラーで配信中♥



スパッツも……



黒タイツも……！



スクール水着も！

♥大決壊シリーズ フルカラーで配信中♥



夢のなかで。



下校中に……、



我慢できず、

——大決壊！！